
飛龍を束ねし転生者

フランク・ホリガン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

飛竜を束ねし転生者

【Nコード】

N9718X

【作者名】

フランク・ホリガン

【あらすじ】

モンハンの世界に一人の不良少年が転生

過酷な自然界で己の力と知恵を駆使して生き残れ！！

これは”生まれ変わって恐暴竜”の息抜きとして投稿した小説であります

恐暴竜とは違い、無双、シリアス皆無です

神さまに会って転生しろ

「起きんかいボケ!!」

グッスリと気持ち良く寝ていたオレは、物騒な怒鳴り声と腹部の激痛によりたたき起こされた

飛び起きたオレは、目に映った風景に啞然とする

オレは自分の部屋で寝ていたはずなのに、今オレがいる場所はどこまでも広がる殺風景な白い空間だ

「どこ見とんねん!!
こっち見んかい!!」

パシンと頭を勢い良くひっぱたかれ、オレの脳が揺れる
後頭部をおさえて振り返ってみると、白装束に杖を持つ、身長も胸も小さい幼女がいた

バキッ!!

「イダッ!? な、なにすんがクソガキ!!」

「殴りたかっただけや……それでウチはクソガキやあらへんわ。」

「黙れクソガキ!!」

ってかここはどこなんだよ!？」

「ウツサイやつやな……ピーピー鳴いて、女々しいやつや。」

幼女はため息をついて首をふる

その仕草にいらっとしたが、相手はタダのガキだと思い込み、ここは我慢しておく

「ここはな、ウチが魂転生させる時に使う部屋や。」

「…なに? 転生?」

オレは白装束の幼女が言ったことに疑問を持つ
転生……もしかしてオレ死んだの?
いや単なる夢か?

「夢やあらへんわ。」

「それで自分は死んどらんで。」

ますますわけがわからなくなるオレに、幼女はさらに続ける

「ウチ神さまやねん…面倒くさいからつつこむなや。」

そいでな、ウチ…漫画とかに出て来る悪党が好きやねん。」

「色々つつこみたいけど……まあいいや。」

で、悪党が好きな神さまがオレに一体なんのようだい？」

「話しが早くて助かるわ。

自分…転生してウチが好きそうな悪党になれや。」

爽やかな笑顔で話しているが、内容はとんでもなかった
幼女で訛りがあって、悪党好きな神さまなどいるだろうか？

「昔はウチ好みの悪党もいたもんや。

昔のジャンプなんて、悪党豊富やったやないか？

特に志々雄とかアシユラマンとか…。

強くてカッコイイのも好きやけど、フレイザードとかアミバ…もし
くはジードみたいなモヒカンもウチは好きやで！」

嬉しそうにジャンプの歴代悪役について語り続ける自称神さま
昔の悪役をベタ褒めした後は、今の悪役はなっちゃんとか、ザコ
の魅力とかを語り出す…

ほうつておいたら一日中語り続けるのではないかと危惧し、オレは
神さまの話を遮る

その際「話しは最後まで聞け」と怒鳴られ、正座させられてオレは
悪党の美学を叩き込まれた

神さまの話を要約すると、こうなる…

？世紀末暴徒最高

？死亡フラグ立ちまくりな悪党が好き

？命乞いしといて、背後から襲うザコも好き

？そしてジャンプの悪役が大好き

……である

オレが今まで頭のすみに想像していた神さまとは、あまりにもかけ離れている

「うちも神さまやなかったら、世紀末でヒヤッハーって言うてみたかったわ。」

「それは神さまの発言として、どうかと思うぞ？」

「なに正義感出しとんねん。

良い人ほど早く死ぬって聞いたことあらへん？」

ここでつつこんだら面倒くさくなりそうなので、オレは素直に頷いておく

「自分素直で気に入ったわ！

そいじゃ早速転生『待てえい！』…なんやねん。」

サラッと先に進もうとした神さまにオレは叫んで止める
今まであまりツッコミ役になったことがなかったが、ここにきてだ
いぶ上達した気がする…

「とりあえずこれだけ聞かせてくれ…。
なんでオレが転生させられるの？」

「んなもん決まっとるやないか。
ウチ好みの悪党育成計画のためや…自分選んだんは、自分に適正あ
るからや。
いやあ、アンタ悪党の才能あんで？」

そんなこと笑顔で言われても全く嬉しくない…

「そんで転生なんやけど…」

もう一つ、この短時間で分かったことがある
神さまは人の話しなど聞かず、自分のペースですすめるわがままな
ガキということだ

神さまはゴソゴソと…パソコンのようなものを出す
曰わく、やりやすいようにするため創ったらしい
というか、転生するかしないかもオレは言っていない

「ほなランダムで選ぶわ…。
…うん、モンハンやな。」

神さまが数あるうちから当てたのは、大人気狩猟アクションゲーム…

「むう…そっぴやモンハンはアイツも転生させたんやったな。
はあ…面倒やの。」

神さまはデータ内の”恐暴竜”と書かれたフォルダの横に、チンピラという名のフォルダを作る

神さまは一通り作業を終えた後、オレに振り返ってくる

「転生した先で困らんよう、付加能力欲しいか？」

「ん…なら病気にakaranいことと、一度見たものを忘れないのと、努力でなんでも身に付ける能力を。」

「つまらんから却下や。
不死身にしたるわ。」

神さまはパソコンの画面を眺めながらオレの意見を退け、設定画面に”不死身”と入力した

抗議しようとしたが、神さまにスネを蹴られて阻止される

神さまは倒れたオレをイス代わりにし、最後の仕上げを済ませる…

「言い忘れとつたけど、転生先はランダムや。

人間になれるかもしれんし、モンスターになるかもしれへんよ。

人間よりもモンスターの比率が多いから、モンスターになるのも覚悟しとけや。」

「それは神さまの力でどうにかならないのか？」

「決まった運命など御免や…なにが起きるか分からんからおもろいこともあるんよ。」

神さまはニヤリと笑い、パソコンを床に置く

さすがに虫に転生するのは可哀想だと、それだけは避けてくれたらしい

「アンタの暴れっぷりを楽しみにさせてもらっで！

ほな、ウチの強烈なデコピンで転生させたるわ。」

「は…もつと穏やかな方法で！」

「問答無用！！」

狩りの世界に一名ご案内や！」

ガシツと掴まれた後に、オレの額に強烈な衝撃が襲い、オレの意識は闇の中に沈んでいった…

産まれろ（前書き）

この小説はあの飛竜に転生いたします!!

自分は飛竜の中で、コイツを一番多く倒した気がします!!
はい!!

産まれる

暗闇の中から急速に目を醒ます…

動こうとしたら壁のようなものに頭をぶつけた

それで完全に目が醒めたが、壁の外からシャー…という蛇のような声が聞こえる

神さまに転生させられたことを思い出し、モンスターに転生する確率が高いことを思い出す

この状況では、おそらくモンスターに転生してしまったのだろう…

そう思ったのは、自分を取り囲む壁のようなもの…おそらく卵の殻だ
そして周囲からは人の声でなく、人間以外の声が聞こえるからだ

こうなったものは仕方がない…そう割り切って殻破り出ることにする

殻は簡単に割ることができ、頭突き一回で亀裂が入る

この殻を破ったら過酷な大自然の中に放り出される

そんな中でも困らぬよう、飛竜もしくは古龍に転生していて欲しかった

あの神さまは転生前に強化はしてくれなかった

それなら、リオレウスやティガレックスなどの強い飛竜に転生したい…

三発目の頭突きで殻を突き破り、外界の光りに目をくらませる
少しずつ目をなれさせていき、自分の周囲を見回して状況を確認する
自分の周りには卵がいくつもあり、どれもヒビが入っていたり、中
にはすでに頭を出している子どももいるが…

頭を出している子どもは皆キョトンと、オレを見つめている
オレも不思議に思い首を傾げる

おそらく自分は彼らと同じ種族で、同じ容姿であろう…

だが、オレを見つめる子どもたちはまるで蛇のような頭で、オレが
なれ親しまない姿をしている

オレが彼らの種族を推定していると、背後から羽ばたく音が近付い
てきた

親の姿を見れば分かるだろうと思い振り返ったが……正直かなり驚
いた

子どもと同じ蛇のような頭、細身の体としなる鞭のような尻尾に、
体の面積の半分以上を占める赤と黒の縞模様の翼…

夢であつて欲しいが、頭突きした時の痛みがそれではないことを証明している…

数ある飛竜の中から、オレ是最悪の種族に転生してしまった…

オレは神さまの身勝手な都合で転生させられた……

最弱の飛竜、蛇竜ガブラスに…

産まれる(後書き)

感想、ご指摘お待ちしております

さて、どうなることやら...

革命に備える…

神さまの気まぐれで、モンハンの世界に転生させられたオレ…
前もって人間に転生出来る確率は低いと言われていたが……
まさか最弱飛竜、ガブラスに生まれ変わるとは予想外だった

神さまから転生前に貰った力は不死身……どうしろというのだろうか？

とは思ったものの、オレは持ち前の前向きな思考で、不死身蛇竜としての人生……もとい蛇生を楽しむことにした

ガブラスといっても悪いことばかりではない
貧弱で脚も弱い、それを補って余りある飛行能力がある

胴体の倍以上もある翼があれば、蛇竜といえども自由に大空を飛び回れる

産まれたばかりの頃は無理だったが、数ヶ月後には空を飛べるまでに成長した

蛇竜の成長は著しく、オレを含めた同世代の蛇竜たちはどんどん大きくなり、半年以上経てば大人たちと同じ大きさに成長した
その中でも、オレの成長ぶりはとても目をひくものがあった

成長期を過ぎてもオレの成長は止まらなく、身体はどんどん大きくなっていき、最終的に普通のガブラスの二倍近い体長でようやく止まった

オレは群れで一番大きく、武器となる牙と尻尾が長かった

同世代で一番最初に翼を使って飛んだのもオレで、同世代の蛇竜たちからはカリスマ的存在となった…

産まれてから一年後…

オレや同世代の蛇竜たちは、群れを維持するための狩りに参加したが…

そこで野生動物の完全な階級社会を体感することになった…

狩りで獲た食料はすぐに自分のものにならず、ロクに働かない年長者のもとに流れる

元人間のオレは憤りを感じたが、多勢に無勢…

群れ全体を率いる年長者と一個のオレは、象と蟻の差だった

他の蛇竜たちはなんの疑問も抱かず、蟻のように働くむしろそういう考えを抱くオレが異端だった

最初こそ我慢していたオレだったが、やがて鬱憤は爆発した

「（もうやってられるか！
何様のつもりだ老いぼれ共めが！！）」

狩りを終えていつも通り獲物をとられた時、オレの怒りの声が古塔に響き渡った

オレが生まれた群れの蛇竜は、密林の中心にポツリと立つ、古塔に巣くっている

オレたち若い世代はその最下層に棲み、狩りが終わればそこで寝起きするのだ

「（騒がないで下さいよボス！
ヤツらに気付かれちまいます！！）」

オレの横で枯れ木の枝に佇む、異様に細身のガブラスがオレを宥める

コイツの名はエディ：尊敬するギタリストと同じ名を付けてやった

その横にいる、ガブラスにしては屈強な身体つきのヤツは、アンディ名前の由来はエディとだいたい同じだ

彼らは同世代のガブラスの中で、オレが最も信頼する蛇竜だ

エディは狡猾で頭がキレ、アンディはオレの次くらいに強い
実際、エディは群れで一番賢く、アンディとオレは群れで一番戦闘
力が高い

それ故年長者に警戒され、最下層のさらに下……雨水が溜まる冷た
く暗い空間に棲まされている

「（ボス、ワイはもう我慢できへんで。
あの悠長に生きてるジジイ共、ガツンとやったるやないかい！）」

いきり立つのはアンディ……どこで覚えたのか、特徴的な訛りで怒鳴る
アンディやエディがこんな思想を持ったのは、オレの教えがあつた
からだ
人間の知識を持つオレがエディらに決起を語ったところ、両者共賛
同したのだ

「（おうよ、ヤツらが寝込んでる今、寝首かいてやるうじゃねえか
……！）」

ちなみにオレが自分に新たにつけた名は、子分たちと同じ理由で……
ヴァイキーだ

興奮して飛び立っていいこうとした時、知将エディが慌ててオレたちを止める
行動を邪魔されてイライラするオレたちだったが、エディに宥められる

エディは猪突猛進気味なオレたちの引き止め役も担っており、その都度適切な言葉で鎮めてくれるのだ

例にもれず鎮められたオレたちは、エディの話を落ち着いて聞くことにした

「（いいですかいボス、あつしらは数いてなんぼなんスから。まずは下準備が必要なんスよ。」

「（んなもんまとめてワイらがシバいたろやないか！）」

「（話しは最後まで聞けアンディ…。
ボスは反旗の計画をあつしらにしか話していないんスよね？）」

エディの言葉に頷いてやると、エディはアンディに続いて説明する

「（同世代や他のヤツらにこれを話せば、もしかしたら仲間になるかもしれない。

同世代のヤツらはもちろん賛同するし、他もいくらか仲間になりそうなヤツは見つけた。」

同世代の蛇竜たちはオレを尊敬しているため、エディが話せば全員仲間になる

そしてエディは、狩りの作業の何気ない 会話で、他世代でも仲間になりそうな蛇竜を見つけたのだ

「（そして、ボスが前々から関係を持つ奇面族を仲間にすれば…革命は確実に成功っス！！）」

塔に棲むのは蛇竜だけではなく、好戦的な部族の奇面族もいる
オレが彼らと付き合ってるのは、あの仮面を見てハロウィンを彷彿させるから…

奇面族とはかなり仲がよいので、共闘することは簡単だ
つまり、計画はすぐにでも発動出来る状態にあるのだ…

「（本当はあの御方の力も借りればいいんすけど……無理っスよね？）」

「（絶っっ対に無理だ。）

革命どころか、オレたちが壊滅させられるわ。」

「（せやせや…あの御方が降臨したら、ワイらまとめて地獄行きや。）」

オレたちの言うあの御方とは……この古塔の頂点に君臨する帝王のことである

絶対に手を出してはいけない、絶対に機嫌を損ねてはいけない恐怖の帝王だ

「（まあ、とりあえず奇面族にはオレが話す。

エディは他世代の、アンディは同世代に根回しをしとくんのだ。」

「（分かりましたぜボス！）」

「（任しとき、ワイがケツひっぱたいてでも仲間にしたるわー！）」

オレたちはニヤリと笑い合い、それぞれの目的を達成すべく、汚水の溜まる地下から飛び立つ

歴史には綴られぬ……小さな小さな革命……

しかしそれは、生物の長く続いてきた営みを、大きく覆す出来事だった……

革命に備える…（後書き）

古塔は蛇竜から帝王と呼ばれる古龍を頂点とし、様々なモンスターが暮らしている

筆頭に、蛇竜と奇面族が挙げられる
もっとも、それ以外に目立った獣はいないが、大雷光虫は多数いる

蛇竜の規模は、100～150程度

主人公の世代は60匹前後おり、群れの多数を占めている

年長者の数が少ないのは、個体が弱いためであり、長く生きれば必然的に同世代の数は減っていく

群れを統率するのは年長者であり、下級世代は絶対服従だが…
人間の知識を持つヴァイキーが革命を起こすこととなる…

古龍の帝王ですが、設定は出来上がっております
革命が終わり次第、登場する予定であります

最後に、この小説は現時点ではまだ、恐暴竜の小説の息抜き程度です

更新は亀です…いや、カタツムリ並みです

恐暴竜が完結したら、こちらに本腰を入れるでしょう

その時まで…どうか記憶の端にでも…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9718x/>

飛竜を束ねし転生者

2011年11月4日19時00分発行